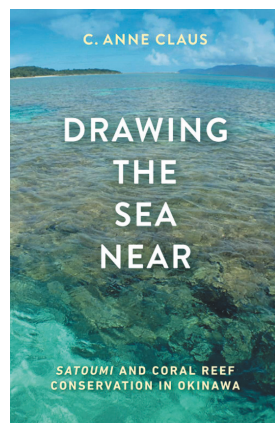


C・アン・クラウス

## 『海への接近——里海と沖縄におけるサンゴ礁保全』

C. Anne Claus, *Drawing the Sea Near: Satoumi and Coral Reef Conservation in Okinawa*

アイケ・P・ロッツ

University of Minnesota Press,  
2020

琉球諸島には、海洋生物多様性にとって極めて重要なサンゴ礁が多くある。これらのサンゴ礁や、それらをよりどころとする種は、汚染や気候変動に脅かされており、近年では、サンゴ礁の大半が死滅している。これを受け、日本や沖縄のアクターたちは、様々なサンゴ礁保全に向けた新たな取り組みを立ち上げている。C・アン・クラウスは、本書において、石垣や沖縄の島々における海洋保全NGOの活動をいくつか紹介している。その成果は、独創的かつ民族誌的にも豊かであり、環境人類学者や沖縄研究者のみならず、さらに広く見れば、開発学やポリティカル・エコロジー、自然保護を専門とする研究者たちの興味をも引き得る、充分に説得力のある学際性を有した書籍である。

『海への接近』は、琉球列島（沖縄県）にある石垣の海沿いの

町・白保へと読者を誘い、WWFの現地調査拠点で、長期的な自然保護事業が行われている「しらほサンゴ村」を紹介する。

一九八〇年代および一九九〇年代にWWFは現地の抗議運動と力を合わせ、サンゴ礁を破壊する埋立地への新たな空港建設を阻止した。その後数十年にわたり、白保のWWF現地調査拠点は「距離のある保全活動」(conservation-far)、すなわち地元住民との積極的な交流ができない国際機関の取り組みから、「身近な保全活動」(conservation-near)、つまり「近きを養い」、「親交を深め」、「保全による影響をもたらすこと」(p.10)を目指し地元コミュニティとも積極的に交流する取り組みへと移行した。しらほサンゴ村におけるこの「距離のある保全活動」から「身近な保全活動」への移行は、ある一人のカリスマ的な人物、WWFサンゴ礁

保護研究センター長・上村真仁氏によるところが大きい。クラウスは、上村氏を「余所者」(survivor)、すなわち国際的な保全活動の世界や自然科学、そして白保のコミュニティにとつてのアウトサイダーであるとし、三者と交渉し間を取り持つことができた人物として評する。上村氏は本書における主なアクターの一人で、一貫して下の名前で言及されることから、彼への親近感が表されている(索引でもまた、彼は下の名前で誤記されている)。

本書は、序章と六つの長い、テーマ別に並べられた章の間に、五本の短めの民族誌的なエピソードが挿入されている。第一章では、白保での空港建設反対運動に関する歴史や当該地域におけるWWFの活動の始まりについて紹介しており、今なお続くアメリカ軍の存在(石垣ではなく、主に沖縄本島に影響を与えている)を含む、沖縄の植民地としての歴史やそうした歴史が現在に及ぼし続ける影響に関する背景情報も提供されている。日本本土の保護論者や沖縄のアクターとの繋がりについて論じる際にクラウスは、「厄介な(南北の)植民地支配をめぐる力学は、数多くの国境を越えた保全事業にも現れており、日本国内の環境保護においてもまた複製されている」(p. 38)と主張する。琉球諸島が依然として植民地として扱われており、沖縄人たちの不都合な多数意見が東京から無視されていることを鑑みれば、驚くほどのことでもないだろう。とはいえ、日本のことをよく知らず、日本が先住少数

民族の権利を構造上無視する事実上の植民地国家であることを認識していない読者にとつては、重要な情報だといえよう。クラウスの研究は、植民地支配における力学とその認識論が、グローバル・サウスのみならず(例えば Warande 2019 を参照のこと)、日本列島内においてもまた、日本の自然保護や開発 NGO により再生産されていることを明らかにしている。

第二章では白保から離れ、読者に「里海」(里山の海洋版に相当するもの)という用語の系譜を示すとともに、その用語が保全をめぐる語りにおいてどう用いられているかを描き出している。クラウスは、「里海」がある特定の種類の海景を指すのではなく(日本本土でみるような入江や湾は、石垣の海の浅瀬沿岸(イノー)やヤング礁の海とも異なる)、保全にかかわる特定の「想像上のイメージ」を指すということや、それによつて人類の文化的実践が生態系にとつて重要であることが認められるということを明らかにしている。「里海」や「里山」が喚起する環境の想像上のイメージは、世界中の保全活動に影響を与えた「原生自然」(wilderness)パラダイムともまた大きく異なる。人間を除外した「野生の自然」(wild nature)の構築を指す代わりに、「数ある協力者となる種の一つ」(one of)としての人間の役割を認めている。この箇所において著者は、美化することなくその概念の強みを認めたいうえで、「里海」概念の出現や大衆化を文脈で捉え、歴史化、紹介す

るにあたり、見事な手腕を發揮している。学生たちに読ませることのできるような「里海」に関する学術的な入門書を長らく探し続けた私にとって、この章は極めて有益かつ包括的な一章であり、その恩恵を大いに受けている。

第三章および第四章は、本書の中核となる部分を構成している。

この章において読者は本当の意味でしらはサンゴ村や白保のコミュニティ、そして上村氏のことを知ることになる。我々読者は、サンゴ村が徐々に通常のWWF保全活動から離れ、より包括的で参加型の活動になった経緯を知らされることになる。サンゴ村が企画した活動の一部は国際的な自然保護の観点から言えばほとんど意味をなさない。しかしその活動は、地元のコミュニティを巻き込み、活動に引き込む役割がある。その活動の中には、日曜日や料理教室、そして伝統的な海垣（インカチ）の復元事業なども含まれている。上村氏（そして著者）によると、このような地元コミュニティを巻き込むプロジェクトは、地元の感覚や文化的伝統を考慮し損なうトップダウンのプロジェクトに比べ、より良い成果につながるものだという。

第三章と第四章は、興味深い豊かな民族誌の詳細な記述に満ちており、活き活きとした読みやすい文体で書かれている。各章の間に挿入されている短めのエピソードもまたそうであり、白保のコミュニティにおける生活の様々な側面を垣間見せてくれる。

蟹を詠う民謡やイノーでの海藻の収穫、海神の神事・祭事など、他にも多数の生活の様子が紹介されている。これらを読む中で、私自身石垣に足を運び、イノーを歩いて渡り、焼きハマグリを味わってみたいという想いに駆られた。それほどまでに強く惹きつけられる民族誌的な記述である。

第五章は、第二章での分析を、第三章および第四章の民族誌的資料と併せ、まとめあげている。同章では、国際自然保護（WWF・IUCN・UN）や海洋科学、そして現地での生態系に関する相反した認識論が、現場においてどう折衝されているのかについてさらに理解を深めることになる。洞察に富んだ一章であり、開発人類学者や生態学者のみならず、自然保護の専門家たちにとつても関連性の高い章でもある。筆者がとりわけ興味を抱いたのは、上村氏の役割、すなわち彼が科学者やWWF本部との良好な関係をどう維持しているかについてであった。上村氏は物議を醸した決断、例えば海垣（インカチ）の建造を正当化するにあたり科学的知識を用いると同時に、「自立した舞台裏の領域を育てて」（p.106）いる。彼が目指しているのは、一部の専門家からみれば「きちんとした」自然保護を構成しているとは言えないにしても、多様な実践を模索することにより、コミュニティの参加を増大させることにある。

最後に第六章において、著者は石垣から何百キロも離れた、サ

ンゴ村やWWFとはまた関係のないSea Seedという沖縄のサンゴ礁保全会社を紹介している。素晴らしい事例研究である。観光客たちは、移植されたサンゴのために資金援助したり、インターネットにアップロードされるその写真や記念メッセージの閲覧をし、寄付をしたり、神社の絵馬のように「神に嘆願」することに、サンゴ礁保全に投資することができる (p. 193)。しかし、この会社と沖縄本島での観光を基盤とするサンゴ礁保全プロジェクト、そしてコミュニティを中心とする石垣のしらはサンゴ村における「身近な保全活動」との繋がりを見出すのは困難である。クラウドスは、二つの事例をまとめることなく結論を結んでおり、Sea Seedの事例は、本書の他の部分と上手く調和しているとは言い難い。この箇所を省き、第五章を最終章として本書の終章とすることもできたのではなからうか。

もう一つの小さな批判は、日本語の書き起こしに関するものである。例えば、「おう」の音が、ある時には<sup>o:u</sup>と転記され、また時には<sup>ou</sup>とも、あるいはただ単に<sup>o:</sup>と書き起こされていることも度々ある。一例を挙げれば、六三ページでは“logai”や“kankyo”の代わりに“kougai”や“kankyo”と表記されている。

とはいえ、これらの問題は些細なものである。総じて本書は極めて優れた研究であり、読みやすく読者を惹きつけるような文体で書かれている。分野の専門家、および、学部生や大学院生両方の

興味の対象となるような、稀な学術書の一冊として数えられるものである。豊かで、理論に基づいた確かな民族誌であり、沖縄や日本に限らず、国際的な自然保全にとつても深い示唆に富んだ研究といえる。

#### 参考文献

Waranabe 2019

Chika Waranabe, *Becoming One: Religion, Development, and Environmentalism in a Japanese NGO in Myanmar*. University of Hawaii Press, 2019.

翻訳：片岡真伊（国際日本文化研究センター准教授）

\*本稿は *Japan Review* 36 (2021) に掲載された英文テキストの日本語訳である。